

# あうる

Treasure every meeting as it's chance  
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話24

レンガや石造りの  
重厚な倉庫が立ち並ぶ小樽運河。  
この風景が生まれた経緯は、  
一体どういうものなのだろうか？

## 運河方式と埠頭方式

坂の多い街、小樽。江戸時代からニシン漁で、明治以降は石炭の積み出し港として、さらに戦前になるとロシア沿海州との貿易拠点としても栄え、かつては札幌をしのぐ経済力を誇っていた。

その繁栄ぶりを今に伝えるのが、小樽運河と周辺の倉庫群だ。

運河を造るきっかけは、明治三十(一八九七)年頃から小樽港の物資流通量が急増し、積み降ろしの施設が必要となったこと。その方法として検討されたのが、埠頭方式と運河方式だった。大型船が沖に停泊し、荷物を舢舨に積んで、引き船で運河を通過して倉庫に運び込むのが運河方式。一方、港に船が直接接岸して、荷物を運搬するのが埠頭方式だが、どちらの方法をとるか、なかなか意見がまとまらず、十年余りも揉めに揉めた。

そして明治四十(一九〇八)年、道庁がやっと出した結論は埠頭方式であった。

## 運河方式に決定が逆転

小樽港の積み降ろしは埠頭方式に決まったが、資金難ですぐには着工できなかつた。

そうこうしているうちに、明治四十二年、小樽築港事務所長として港の建設に従事し、北防波堤(日本初のコンクリート製防波堤)を造った廣井勇が、埠頭方式より運河方式の方が、倉庫等の位置関係からして好ましいとの考えを示したため、決定がひっくり返ってしまつた。このような経緯で、ようやく大正三(一九一四)年八月、運

河を造る工事が始まった。  
意外に知られていないのが、小樽運河の  
工法だ。運河といえは普通、陸地を掘って  
水路をつくるのが一般的だが、小樽運河の



完成当時の小樽運河。写真奥では工事が続いている（小樽市総合博物館運河館所蔵）

場合は、海を埋め立て、その一部を水路と  
して残すという工法で、国内唯一のもので  
ある。

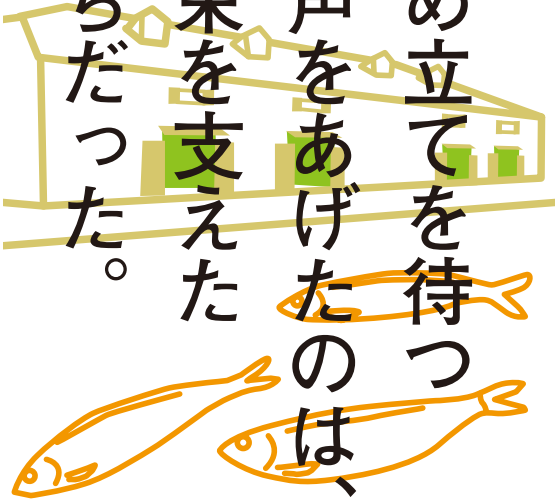
運河が完成したのは九年後の大正十二  
（一九二三）年。長さ一三二四メートル・幅  
四〇メートル・水深二・四メートルの水路  
であった。海が運河になったのである。

### 石川啄木の見た小樽

小樽市総合博物館運河館の「しゃちほこ  
のように、小樽運河沿いの建物には特徴的  
な飾りのあるものが多い。二階の庇上部に  
突き出た「うだち」もそのひとつ。隣家と  
の境に防火壁として設けられたもので、財  
力のある者がこれを高く掲げて繁栄のしる  
しとしたことから、「うだつ上がる」の語  
源となったと言われている。そんな繁栄の  
シンボルが運河沿いの建物にたくさんあ  
る。

わずか百十五日ではあるが、その頃、小

衰退し全面埋め立てを待つ  
運河に保存の声をあげたのは、  
かつてその繁栄を支えた  
小樽の市民たちだった。



樽で暮らしていた石川啄木も、「初めて見  
たる小樽」（『小樽日報』明四〇・九・一五）で  
「小樽に来て初めて真に新開地的な、真に  
植民的精神の溢るる男らしい活動を見た。  
男らしい活動が風を起す、その風が即ち自  
由の空気である」と記している。さらに「内  
地の大都会の人は、落し物でも探すように  
眼をキョロつかせて、せせこましく歩く。  
札幌の人は四辺の大陸的な風物の静けさに  
圧倒されて、やはり静かに緩慢と歩く。小  
樽の人はそうでない。四辺の風物に圧倒さ  
るるには、あまりに反撥心の強い活動力を  
もっている。されば小樽の人の歩くのは歩  
くのでない、突貫するのである。朝から晩  
まで突貫する小樽人ほど恐るべきものはない」と、エネルギーに満ちた当時の小樽  
人を褒め称えた。

### 観光運河に

運河方式による荷揚げは、戦後の樺太輸  
送の断絶と太平洋側の苫小牧港の整備、小  
樽港湾内の埠頭の整備によって衰退して  
いった。

昭和四十年代になり、小樽市役所はす  
でに無用の長物と化した小樽運河を埋め立  
て、道路として整備する方針を打ち出し  
た。しかし、これに反対する運河の保存運  
動が起こり、全国規模で高まっていた。  
これに対し、市側は妥協策として運河を半  
分の幅にして残す案を提示したが、全面保  
存を求める保存派と意見が折り合うことは  
なかった。

運河創設時と同様、長期戦になるかと思  
われた昭和五十八（一九八三）年、市側が  
埋め立て工事に着手。六十一年に道道小樽



昭和40年代頃。廃屋となった倉庫と錆びついた船（小樽市総合博物館運河館所蔵）

臨港線が開通し、小樽運河は全長一四四  
メートルの観光運河に生まれ変わった。道  
道沿いの運河は半分の幅になったが、北側  
の約四七〇メートルは、北運河として完成  
当時の原形を留めた。

同時に運河沿いにはガス灯やベンチのあ  
る「小樽運河ふれあいの散歩道」という散  
策路が整備され、全国的にも人気の高い観  
光名所となった。そのお蔭で、取り壊すこ  
ともできずに放置され、廃屋となっていた  
倉庫群にも新たな命が吹き込まれた。

本来の機能を失った運河と倉庫群だが、  
それが幸いして、小樽の観光を支える存在  
になるとは、何という歴史の皮肉である  
う。



# あつろの杜

税理士  
加藤良己さん

Interview

税務署で長年、酒税を担当していた加藤良己さん。北海道の酒蔵家の起源から現代までを二十年にわたって調べ、「北海道の酒造家と酒造史資料」に集大成した、加藤さんのお話です。

## きっかけ

北海道の酒造家の歴史を調べるきっかけは、僕が国税局の酒造の企業係長の時、三浦さんという部長に「お前たち、酒、酒と言っているが、北海道の酒屋の歴史を知っているのか」と言われたこと。

誰も知らないんですよ。「そういう見方もあるんだな」と思っていたところ、たまたま昭和十一（一九三六）年に国税局が作成した台帳を見つけた。それを見ると、酒屋さんがずらっと台帳に載っている。「そうか」と。それがきっかけとなり、国税局にあった資料を基に、市町村の歴史書も併せ見ながら調べていきました。仕事の傍らという二足の草鞋だったものですから、今回本にまとめるまでに二十年もかかりました。

## 酒税法の変更

日露戦争は酒税のお陰で戦えたというぐらい、その重みはすごくて、飲め、飲めといって戦争をやっ

# 酒屋は地域の歴史とつながっている…



加藤良己  
かとうよしみ

1929年生まれ。46年鉄道教習所卒業、国鉄中標津保線区に勤務。51年国鉄を退職し、税務講習所に。52年根室税務署に配属。56年網走転勤を皮切りに室蘭、釧路税務署の間転勤を歩く。釧路税務署の3年目に酒税に移り、その後札幌中署に転勤。以来酒税担当一筋。退職後、石狩市で加藤良己税理士事務所を開設。

『北海道の酒造家と酒造史資料』  
サッポロ堂書店 A4判 214頁  
定価 本体2,500円+税



たらしい。それだけに税務署の検査は非常に厳しくて、何から何まで立ち会った。その検査簿が今も税務署に残っています。

平成元（一九八九）年頃、「酒税法」がガラッと変わった。以前は清酒とウイスキーに特級・一級・二級がありましたが、清酒の場合、各級の税率差が凄いですよ。そこで、酒屋さんは税金を安く済ませるために、吟醸酒などの特級酒ク

ラスを二級として売った。

特級・一級・二級というのは、全部鑑定官の審査を経て決めますが、最初から審査なんか受けないよといえ、それは二級酒になります。そのため、昭和五十年代には、特級よりもはるかに旨い二級がたくさん出回るようになった。それで級別制は廃止になりました。でも酒屋さんはやっぱり、俺の売るものはいいものだと、高いものを売りたい。だから吟醸・大吟醸・特選などと、自分たちでランクを付けているんです。

## 酒屋と地域性

小林酒造が北海道に来たのは明治十一（一八七八）年。明治三十四

年頃に札幌から栗山に移りました。炭鉱地帯をターゲットにしたんでしょう。旭川は、明治三十一（一八九八）年頃、鉄道が開通して師団司令部ができた。それで旭川に酒屋が集中しました。

珍しい例が新十津川町の金滴酒造。奈良の十津川郷から移住して来た時に、「俺たちの飲む酒は俺たちで造ろう」ということで、地域の農家が全部株主になった。根室は千島列島があったから酒屋ができたんでしょ。『北の勝』は、辛い、こういうキャッチフレーズです。

釧路の『福司』も昔から辛い酒というイメージがあります。釧路で酒を造ったのは、炭鉱がありましたからね。札幌は今「千歳鶴」の一軒だけです。札幌にしては少ないなと思います。昭和四十（一九六五）年に私が転勤で札幌に来た時は、四軒あったんですが、小樽は、樺太や利尻・礼文への直行航路のお蔭で、ずいぶん酒屋業が繁盛していました。函館は昔から、山形の大山衆や伏見・灘方面の酒がどんと入って来ていた。本州の酒がどうして旨いかというと、船に揺られて樽に馴染むから。昔の酒は杉樽の香りがするというのが、いい酒に数えられる要素のひとつでした。やはり人のたくさん集まる所が、酒の消費量も多いです。炭鉱

はみんなが集まって酒盛りをする機会が多い。漁師も番屋に集まって飲んだりする。でも農家の場合、みんな一杯飲もうなんて、あまり聞いたことがないですよ。それで十勝の酒屋は小さかった。

## 酒は香りが大切

僕は家で飲むときは冷や酒ですが、外で飲むときは燗酒。早く酔いが回りますから。昔から、「冷や酒と親の意見はあとからきく」という格言があるように、冷や酒は酔うのが遅い。その代わりあとでこたえますよね。通は「燗酒なんて」と言いますが、鑑定官室に行っても「本場の酒の味は冷やで飲む酒だ」と。まず香り、それから味を楽しむというのが酒の飲み方です。昔、杜氏は、吟醸酒仕込みの時、タンクの傍に布団を敷いて寝泊まりしながら、常に香りがどうなっているかチェックしていた。そのぐらい気を遣っていたんです。杜氏に言わせると、リンゴの腐敗直前の香りのするのが一番いい酒。その次はバナナの香りだそうですね。今、北海道の酒屋は二三軒です。去年は北海道の酒が足りなくなり、売る酒がない所もあったという話です。結構伸びているんでしょ。北海道の酒は悪くないですよ。

昨今は、今まで使っていた日本語に代わり、外来語を使うという傾向が強くなっています。

例えば「ワイン」。「葡萄酒」というと、なんとなく甘ったるい味や古臭さを連想させるのか、いつの間にか「ワイン」と言うようになってしまいました。

同じように「魔法瓶」は「ポット」に、「さじ」は「スプーン」に、「寝台」は「ベッド」に、「力を増す」は「パワーアップ」に代わりました。

また、老人はあまり横文字が得意ではないはずなのに、「老人優先席」を「シルバースーツ」とも呼んでいます。「高齢者の人材派遣所」も名称は「シルバー人材センター」です。ストレートに高齢者、あるいは老人と呼ぶのを避けるためでしょうが、本来、英語の「シルバー」には「高齢者」という意味はありません。まさに日本人らしい、味のある造語です。

明治時代になると、鎖国が終わり、欧米から文化・社会制度などに関する外国語がドツと入ってきました。これに対して当時の日本人は、その言葉をただストレートにカタカナで表わすのではなく、漢字で言葉を創造し、普及させました。そのお蔭で、他の多くの国々では欧米の知識・技術を学び、取り入れるために英語力が必要だったのに対し、日本は母国語だけで幼稚園から大学まで進学できる国になったのです。

そんな日本人が、これからは小学生の頃から英語を学ぶようになります。ということは、今後ますます、カタカナ表記が増えてくるのでしょうか。

でも時には、先人たちのように外国語を的を射た日本語に変えてみるという工夫も必要なことではないでしょうか。

O W L I N F O R M A T I O N

ゆめのとびらを ひらくのは あなたです。

札幌市青少年科学館プレミアムプラネタリウム  
おばけのマールとゆめのとびら  
2月1日(日)～4月30日(木) 火～金11:00～土日祝11:20～(30分)  
※5月1日以降の予定は同館HPでご確認ください。  
札幌市青少年科学館(札幌市厚別区厚別中央1条5丁目 TEL 011-892-5001)  
料金/大人500円(中学生以下無料)

札幌の円山に住むおばけのマール。絵本「おばけのマール」シリーズ第1作が生まれて10年目の記念の年に、第6作「おばけのマールとふしぎなかがく」の舞台となった札幌市青少年科学館で、マールが主役のプラネタリウム番組が上映中です。科学館初の幼児向け番組となるこの作品のストーリーは、絵本の作者による書き下ろし。子どもたちの宇宙との初めての出会いを意識した、家族でも楽しめる作品です。初の試みにあたり、今回は絵本のスタッフに加え、ナレーターにDJの須摩智子さんを迎えての制作となりました。  
お話では、プラネタリウムを訪れたマールが、星のお勉強…と思いきや、新しいお友だちを探しに出発! 天文解説員さんを巻き込んだカワイイ冒険がはじまります。



現代具象画の代表的作家、札幌初の回顧展

笠井誠一展  
1月25日(日)～3月29日(日) 9:45～17:00(入館は16:30まで)  
札幌芸術の森美術館(札幌市南区芸術の森2丁目75 TEL 011-591-0090)  
休館日/月曜日  
観覧料/一般700(560)円、高大生350(280)円、小中生150(120)円、小学生未満無料  
※( )内は前売・20名以上の団体料金

「非常に明晰なシンプル美」——清廉な空気をまと、緻密に構築された独特の静物画で知られる笠井誠一は、北海道が生んだ現代具象画の巨匠です。  
1932年に札幌に生まれ、戦後、札幌西高在学中の17歳の時に画業を志し単身上海。武蔵野美術学校を経て、東京藝術大学・同専攻科を修了後、給費留学生として渡仏。帰国後は愛知県立芸術大学で教鞭をとりながら、「形と形の織りなす様々な空間の追究」を続けてきました。  
本展は生地・札幌初の大規模な個展で、初期の風景表現や人物画、滞欧時の作品から近作に至るまでの静物画等、約120点の作品と資料で67年にわたる歩みを紹介。2月28日には作家本人が自作について語る、アーティストトークを実施します。また、本展の図録は同美術館の他、中西出版から2,000円(税抜)で販売。一般書店での購入も可能です。



笠井誠一  
《紫陽花とウクレレのある卓上静物》  
1996年

北海道の暮らしの未来を考える

みんなで30年後を考えよう  
北海道の生活と住まい  
30年後の住まいを考える会・編著  
定価1,800円+税

30年後には2/3とも言われる急激な人口減少が予測される北海道。快適な冬の暮らしを追求し、「北方型住宅」を得た北国の住まいは、この大きな変化をどう乗り切ればよいのでしょうか。  
この問題に対し、道内の建築専門家たちが人口や住まいの傾向を分析。全国の事例を研究しながら、30年後の豊かで「持続可能な」生活と住まいの実現に向けて必要な変化を、一目で分かるビジュアルで提案します。



30年後の住まいを考える会  
(発売元:中西出版)  
A5判、119頁  
2014年12月刊行

英文法が基礎から学べる

基礎からの英語学習  
パワーアップ版  
熊谷隆司・著  
定価1,500円+税

好評を博した英文法の学習書「基礎からの英語学習」が、パワーアップした改訂版になりました!  
毎日無理なく続けるために、1日の学習量を設定。90回のレッスンでは、図や用例のほか、理解を深めるための参考事項を豊富に用意し、レッスンの確認ができる簡単な確認問題のURLアドレスも掲載中です。  
改訂版では33の豆知識が追加され、さらに充実した入門書となっています。



中西出版  
A5判、314頁  
2014年11月刊行

心臓病学の発展史

心臓病学小史  
世界と日本の心臓病学の発展  
田辺福徳・著  
非売品

心臓病学の発展史を記した成書は欧米では多く見られますが、日本での出版はごく僅かに留まっています。本書は心臓病学の古典的名著や文献などの貴重な資料を原書から紐解き、黎明から20世紀に至る流れを概説。学問成立の過程が分かりやすく書かれています。  
進歩に貢献した医学者たちの人となりにも多く触れ、個人的なエピソードは読み物としても楽しめる充実した内容となっています。



田辺福徳(自費出版)  
A5判、256頁(予定)  
※入手ご希望の方は中西出版までお問い合わせください。



今年シリーズ第1作「おばけのマールとまるやまどうぶつえん」が発刊されて10年目にあたる。1月末に感謝の気持ちを伝えようと、10周年記念展を開催した。多くの来場者を迎えることができ、激励の言葉をいただいた。あらためて感謝である。さらに2月1日より、最新作の舞台である札幌市青少年科学館で、マールが主役のプレミアムプラネタリウム番組が上映されている。子どもたちに夢を持ってもらえるよう、今後もマールの冒険は続く予定である。もう一つ、北海道が生んだ巨匠の画業を継いだ「笠井誠一」について。弊社出版物では2度目となるが、図録に「AR」機能を付け、スマートフォンやタブレット端末で、動画を再生し楽しめる仕掛けを用意した。生い立ちからアトリエの様子まで、紙面では表せない魅力を味わっていただきたい。年初の発刊予定が遅れたが、今年も様々な人と出会い、地域に根ざした出版を心がける積もりである。(Y)

●発行・編集/中西出版(株)  
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-14  
電話011-785-0737 FAX011-781-7516  
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp  
●発行責任者/林下英二  
●発行日/2015年2月25日



http://nakanishi-shuppan.co.jp